

〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉  
- 『キューティ・ブロンド』に見る女性の連帯の可能性 -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 絵美利 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/0002000403">http://hdl.handle.net/10291/0002000403</a>

【献呈論文】

## 〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉

——『キューティ・ブロンド』に見る女性の連帯の可能性——

〈Eternal Girl〉 and 〈Mean Girl〉

: Possibility of the bonds of sisterhood in *Legally Blonde*

政治経済学部兼任講師 田中 絵美利  
Tanaka, Emiri.

### 1 はじめに ——私的で小さな告発——

はじめに、この文章を私的な話から始めたい。

筆者はもともと近代文学の研究をしていたが、こうして論文を書くのはずいぶんと久しぶりである。明治大学で非常勤講師として勤務し、アカデミックな〈場〉にかろうじて踏みとどまっているが、学会や研究会などのコミュニティからはすべて離脱して久しい。

それは、筆者が〈アカデミック・ハラスメント〉と呼ぶべき仕打ちに遭い、研究する場を奪われたからである。詳細はここでは語らないが、当時、筆者がどのような目に遭っていたかを熟知していた人は学内、学会に複数いる。また、同様の目に遭った同輩もいる。

SNSは世界を大きく変えた。近年、SNS上でハラスメントを告発する女性、性被害を受けたことをカミングアウトし、加害者への処罰を求める訴えを起こす女性が見られる。女性に限らず、社会的には弱い立場にいる人物が、自分よりも社会的に強い立場にいる人物の不正をSNS上で明らかにする行為は日々行われている。SNSは社会的に声を奪われ、声を消されてきたマイノリティに発言する場を与えた。

だが、筆者がハラスメントの被害を受けた当時、SNSはまだそこまで広く利用されていなかった。筆者が大学院博士後期課程に入学したのは2002年である<sup>1</sup>。2ちゃんねるで匿名の告発が行われることはあったが、2ちゃんねるは現在広く使われているTwitterやInstagramと比較すると“無法地帯”であり、そこに真剣な告発を書き込むことにはまた別の勇気が必要だった。「裁判を起こしたければ起こさない」と筆者に言い放った学内関係者もいたが、裁判を起こすハードルはあまりに高かった。ハラスメント委員会もまだ組織されたばかりで、相談に出向いた筆者

<sup>1</sup> 現在、日本国内において告発の〈場〉として最も多く利用されているSNSはTwitterであろう。Twitterのサービス開始は2006年である。Twitterは2023年7月にXと名称を変えた。が、便宜上、また反発の意も込めてここではTwitterと呼び続ける。

をどう扱っていいのか戸惑っているように見えた。週刊誌への告発を提案してくれた友人もいたが、無名の若い女性研究者の告発など価値のないことは重々分かっていた。

SNSを通じてのハラスメントの告発、インターネット上のフェミニズムの新たな高まりには希望を感じると同時に、複雑な思いもある。筆者が持てなかった〈場〉、筆者が得られなかった不特定多数からの賛同／いいね！を得られることへの羨望、これまで沈黙を強いられてきたマイノリティたちが勇気ある行動を起こし、その存在が可視化されるプロセスへの敬意はもちろんある。が、その一方でこの「フェミニズムの高まり」の最終的な目的地はどこなのだろうか、と懐疑的にもなる。個々の事例についてのゴールは明確であるが、では〈フェミニズム〉としてのゴールはどこに設定されているのだろうか。

近年、筆者よりも若い世代の優秀な研究者たちによって、フェミニズム研究、ジェンダー研究は大きな進展を見せている。2000年代の激しいバックラッシュを吹き飛ばす勢いがある。若い世代だけでなく、上野千鶴子氏のような女性学研究者の第一人者も変わらず活躍されている<sup>2</sup>。

が、アカデミックな世界とは距離を置きながらも学生と対話する機会を常に持ち、若い世代の生の声<sup>3</sup>を聞いてきた筆者は、やはりある種の〈分断〉を感じざるを得ない。フェミニストであることを自覚し、それを公にする者とそうでない者との温度差、アカデミーという特殊な世界に身を置く者と、その外の世界で生きる多くの“普通の人々”との温度差を感じてしまうのだ。

この温度差は、日本の〈フェミニズム〉／〈ポストフェミニズム〉の持つ特殊性にその根拠を求められるだろう。今回、文章を書く機会を与えていただいたので、アカデミズムの内にも外にも定まった場所を得られなかった者として、その特殊性をまとめていきたい。あまりに久しぶりの経験で、論文を呼ぶのもおこがましい拙いものとなるだろうが公にしたい。

本来、このような私的な告発を論文（たとえ試論や研究ノートだとしても）に書くべきではない。が、ジェンダーを研究対象としたことで“アカハラ”に遭った筆者としては、まさに「個人的なことは政治的なこと」であった。15年ぶりに筆を執る動機が、多くのマイノリティたちの勇気ある告発に支えられている事実もあり、私的な、かつ小さな告発から文章をはじめさせていただいた。

なお、筆者に“アカハラ”を働いたのは、筆者の指導教授である故・小川武敏先生ではない。小川先生は最後まで筆者の活躍を期待してくれていた。ハラスメントは小川先生という“父”を失った“遺児”に対して行われた。この点も非常に示唆に富んだファクターであろう。筆者個人の体験は、決して個人的な出来事ではないのである。

<sup>2</sup> 上野千鶴子氏は、2021年明治大学国際日本学部の特別招聘教授として特別講義「ニッポンのミソジニー」(全5回)を行った。最終回はシンポジウムがZOOM上で開かれ、筆者も聴講した。多くの学生が参加し、ジェンダー研究が“まだ生きている”ことを確認する機会となった。

<sup>3</sup> 筆者は現在、明治大学政治経済学部にも所属し、政治経済学部と国際日本学部で授業を担当している。本来自分の専門である文学研究を志す学生とはほとんど接点はない。つまり、文学をあくまで一般教養として学ぶ学生との対話が主である。

## 2 ポストフェミニズムにおける“フェミニスト”イメージの変化と女性の対立

概して、“フェミニスト”のイメージは悪い。フェミニストの典型的なイメージは、男嫌いのモテないおばさん、ヒステリックでダサイおばさんであると言っても、決して言い過ぎではないだろう。このような悪いイメージを持つフェミニストを、ロザリンド・ギルは「興ざめフェミニスト」と表した（ギル 2020, p.167）。第二波フェミニズム以降、“フェミニスト”にネガティブなイメージがつきまとうようになったのは、日本に限らないのだ。

第三波フェミニズムにおいて、本来当事者となるべき女性たちはすでにフェミニストの悪いイメージをすり込まれていた。田中東子は以下のようにまとめている。

その担い手は、いまだ達成されていないものも含めて第二波フェミニズムの理想が自明視されるポストフェミニズム時代に生まれ教育を受けた女性たちであり、しかし同時にバックラッシュ期にフェミニズムと出会ったがゆえに自らをフェミニストであると自称することに戸惑いを感じる女性たちであった。（田中 2020, p.20）

日本では第三波フェミニズムの象徴として挙げるべき大きな動きはなかったと言われている<sup>4</sup>。欧米では、第三波フェミニズムにおいてフェミニズムはすでに必要のないもの、すでに女性が得るべき権利は得られていると見なされるようになっていた。しかし、日本では90年代以降、フェミニストが何よりも「興ざめ」な存在であり、仮に自分の置かれている状況に満足していなかったとしても、フェミニストになるという選択肢を選ぶことが憚られたからである。欧米に比較すると第二波フェミニズムの成果も不十分であったにも関わらず、日本においてフェミニズムは確実に悪評を帯びていた。

しかし、欧米において現在フェミニズムは第四波のまっただ中にあると言われており、その“波”の中でフェミニズムは“ポピュラー化”している。第四波の特徴として挙げられるのはSNSを使った運動である。#Me Too 運動を代表とするハッシュタグ・フェミニズムだ。誰もがSNS上で（多くの場合は匿名で）フェミニストとしての、あるいはフェミニズムに基づいた主張を掲げること

<sup>4</sup> いわゆる“ガングロ”に代表される“ギャル”（＝“コギャル”）の存在を日本における第三波フェミニズムの顕れであると指摘する声もあるが、「どこか無条件にイメージする「コギャル」像」は「メディアによって部分的に捻じ曲げられたもの」だと関根麻里恵は述べている（関根 2020, p.80）。“モテ”を意識せずに自分たちのしたいメイクをする“ギャル”は男性から一方的に与えられる価値観とは異なるオリジナルの価値観を持っていたと言える。が、イギリスの第三波フェミニズムの象徴とされるスパイス・ガールズのようなブームとはならなかった。あくまでも特異な存在として着目されていたのである。メディアが安易に援助交際と“ギャル”を結び付けたものもあるが、同時代の多くの日本人にとってはあまりにも“斬新”で“規格外”だったからとも言えよう。顔を真っ黒に塗り、油性マジックをアイブロウライナー、アイライナー代わりに使う“ギャル”はあるべき女性の姿からは逸脱していた。それだからこそ彼女たちの存在から〈フェミニズム〉を読み取るべきであると同時に、異端な存在としてメインストリームからははじき出されたという事実にも着目する必要があるだろう。

ができ、それに賛同することができる。発言している本人がフェミニズムを意識しているかどうかはともかくとして、SNS 上においてフェミニズムは前よりもアクセスしやすくなっている（が、同時に反発も強くなっている）。#Me Too 運動はインターネット上だからこそ実現した女性同士の連帯であった。

“ポピュラー化”したフェミニズムは、フェミニストのイメージを変えた。エマ・ワトソンやビヨンセ、テイラー・スウィフトなどの有名人がフェミニストであることを公言したことで、フェミニズムは“ポピュラー”となった。どう見ても男嫌いのモテないおばさんではない女性、むしろどちらかと言えば男性からもてはやされるであろう魅力的な女性がフェミニストであることを堂々と公言したことで、フェミニストであると自称するハードルが下がったのである。

しかし、ポピュラー化は可視化を伴う。エマ・ワトソンのような女性が作り上げるフェミニズムが広く受け入れられポピュラー化するのには、それがルッキズムと強く結び付いているからだ。エマ・ワトソン自身がルッキズムを利用しているという意味ではない。一般論として、美は強い武器となる。また、『ハリー・ポッター』という大人気シリーズに出演したことによる知名度と好感度は、その発言のイメージを大きく左右する。つまり、発言の内容ではなく、誰がその発言をしているかでその発言の受け取り方が変わるのだ。「興ざめフェミニスト」ではなく「感じのいい女性」、特にルッキズムの観点において「感じのいい女性」だからこそ、みなその発言に耳を傾けるのだ。

「感じのいい女性」によって展開されるフェミニズムは、新たな分断を生むこととなっている。エマ・ワトソンのような「仕事も家族も素敵なライフスタイルも、すべてを手に入れたパーフェクトな人生を謳歌」（田中東子 2020, p.29）している女性だからこそ「感じのいい女性」と受け止められ、フェミニストを自称できる。「パーフェクトな人生」を持てる女性などごく限られている。「パーフェクトな人生」を送る「感じのいい女性」によるポピュラーなフェミニズムは、同時にポピュラーなミソジニーを生み出しているのである（バネット＝ワイザー、サラ 2020）。

フェミニズムの一環として、女性自身が自分自身の身体を労ることを推奨する動きが見られる。フェムテックは、月経や妊娠、出産といった女性が抱える身体的な悩みを解決し、より女性が楽に暮らせるような製品であり、SDGs と関連付けられ 2020 年ごろから日本でもよく名前を聞くようになった。このような試みは女性にとっての選択肢を増やすという点でいい取り組みであるとは言える。

が、フェムテックに関する記事を読んでいると、その関の高さに気付かされる。Web マガジン『metropolitana Tokyo』に「心身の準備を整えて、本当の自分を迎える準備を [フェムテックを、もっと! ]」と題された記事が掲載されている（産経新聞 2023）<sup>5</sup>。この記事では、料理研究家の和田明日香、起業家の奥田浩美がフェムテックの一環として、自分の心身といかに向き合

<sup>5</sup> この記事は、2023 年 3 月 8 日・9 日に行われた「フェムテックを、もっと! ——家庭や職場でココロとカラダを学ぶ 2 DAYS——」というオンラインイベントの一部をまとめたものである。このイベントは 9 つのセッションに分かれ、それぞれのテーマに即してゲストが対談を行った。  
[https://www.sankei.com/special/femcareproject/event/2023-mar/?utm\\_source=metro&utm\\_medium=qr&utm\\_campaign=metro202303](https://www.sankei.com/special/femcareproject/event/2023-mar/?utm_source=metro&utm_medium=qr&utm_campaign=metro202303)（2023 年 10 月 12 日閲覧）

うべきかについて語っている。「一人ひとりの個性が尊重されるようになったいま、“自分らしさ”について考える機会も増えている。自分のありのままの姿を解放するために、心身をどのようにケアしていけばよいのか？」がこの対談のテーマだ。

「からだのケアは、第一にからだにいいものを食べることに。外界から内側を守り、内臓とも一枚皮でつながっている肌を保湿することも大切にしています」と和田さん。奥田さんは「からだに関してはとにかく敏感にしようと心がけている」と語った。

フェムテックが「自分らしさ」と結びつけられている点に着目したい。そもそも、フェムテックは女性が生理やPMS、妊娠、出産などで男性よりも心身に不調を感じる機会が多いために生みだされた。特に日本は低用量ピルの認可が諸外国と比べて遅かったり、無痛分娩を母性と結びつけたりと、女性に痛みを強いる傾向がある。よって、少しでも生理痛が楽なように西洋・東洋医学の知識を持つこと、母性に対する固定観念を取り払うことは女性にとってベターな生き方を選ぶきっかけとなり得る。が、それが「自分らしさ」と連なる必要はない。「自分らしさ」とはずいぶんと耳障りのいい言葉ではあるが、結局それが何を指すのか分からないマジックワードである。例えば、男性が性欲を解消するために風俗店に行く選択をすることを「自分らしさ」という言葉で表すだろうか。自分らしさとは無関係に女性は女性特有の生理現象から逃れられない。

また、この対談の中で「自分らしく」生きるためにやるべきと挙げられたことは、多くの現代女性には困難だ。栄養満点の食事を摂り、部屋の湿度に気を遣い、常に自分自身のからだに敏感でいる。それは社会的に成功し、金銭的にも時間的にも余裕のある女性だからこそ許される行為だ。一時期、「ていねいな暮らし」が流行語となっていたが、まさにそれである。毎日駆けずり回るように働き、子育てをしている今の日本の女性に「ていねいな暮らし」ができるだろうか。この「フェムテックを、もっと！」は男性も含めて21名のゲストが参加したが、そのほぼ全員が社会的な成功を収めた“名のある人々”だ（1名だけ女子高生が参加していた）。この中に1人でも、家計のやりくりで悩み、ドラッグストアで数百円の化粧水を買って、美容院は半年に1回行ければいい方といった、“名もなき令和の日本女性”が参加していれば、もう少しリアリティが生まれただろう。いかに「ていねいな暮らし」が困難か、生理用ナプキンを買うことができないほどの貧困層が生まれている今の日本で、栄養やら保湿がどれほど贅沢なのかを考えれば、「自分らしさ」を語るなど一部のセレブに許された特権的な行為だと分かるだろう。コンビニで“ストゼロ”を買って、家に帰る途中で飲みきり、化粧も落とさず風呂にも入らずに寝る庶民の密かな楽しみは、決して「自分らしさ」として称揚されることはない。

フェミニズムのポピュラー化、それは女性同士の対立を生み出している。SNSを通じてフェミニズムがポピュラー化してはいるが、その多くが名もなき女性の明確には表せない日々の不満によって構成されている。それをフェミニズムの発言としてまとめる立場にいる女性は、一定以上の教養を持っており、自分の不遇が世の中のシステムによって生み出されていることに気付けな



い女性とは明確な格差がある。フェミニズムを知っている女性は、「それは政治の問題だ、政治を変える必要がある」とすぐに言えるが、多くの“普通の”女性の不満は日常的なレベルで留まっている。「個人的なことは政治的なこと」であると知らずに、ダンナの不満、義両親の不満、子育ての不満、恋人の不満を訴えている女性が SNS には大勢いる。

たとえば、インターネットを見ていると、ワーママ対専業主婦の対立がよく見られる。ワーママとはフルタイムで仕事をし、子どもは保育園に預けている女性のこと、専業主婦はパートタイムで働いているケースも含むが夫の扶養範囲内でしか働いていない。この対立が実際に存在するものなのか、それともメディアが作り出したフィクションなのかは分からない。が、インターネット上には互いにマウントを取り合うワーママ対専業主婦の（醜い）争いが繰り広げられている。専業主婦を自立していない、金銭的に余裕がないと見下すワーママ、ワーママを子どもに接する時間がなくてかわいそうと見下す専業主婦。怒りをぶつけるべき相手を間違えたまま、女性同士での対立が続いている。

このように日本のインターネット上には、#Me too 運動のような女性の連帯よりも、むしろ女性同士の対立の方が目立っている<sup>6</sup>。それは今に始まったことではないにしろ、女性同士の連帯、女性同士の結託がなければ、日本の女性が置かれている状況は変わらない。今の状況では、日本に第四波フェミニズムが起きているとは到底言えない。本論では、現代日本において女性の連帯はどうすれば実現するのか、そもそも女性の連帯を阻んでいるのは何なのか考察していきたい。

### 3 女性同士の連帯、それを阻むもの

#### 3.1 女性の〈ホモソーシャルリティ〉の可能性

女性を劣位に置く男性中心的社会の根幹には、男性たちによるホモ・ソーシャルな体制があるという認識は、広く共有されている（セジウィック 1985）。ミソジニーとホモフォビアを共有する男性たちはホモ・ソーシャルなコミュニティを作り、女性を媒介として結束を強めていく。この図式は、たしかに実際の社会、あるいはその社会の中で紡ぎ出される多くの物語の中の人間関係に当てはめることができる。近代以降の多くの物語は〈ホモ・ソーシャル〉で説明をすることが可能である。

では、女性もまた男性たちのように結束を強めれば男性たちに独占されてきた地位を獲得できるのか、男性と女性が対等な関係となれるのか。

東園子は、もともとイブ・コゾフスキー・セジウィックは、〈ホモ・ソーシャル〉という用語

<sup>6</sup> 日本では2019年に石川優実による#Ku Too運動が展開した。女性にパンプスやハイヒールの着用を強制することを反対する署名を募り、18,856人がこれに応じた(change.org 2019)。一部の企業が女性従業員にローファーやスニーカーの着用を認めるなど一定の成功は収めたが、社会通念が大きく変化したとは言えない。18,856人の署名も決して多いとは言えない(SMAPの解散撤回を求める署名は37万筆以上集まったという(J-CAST 2016))。

を男性に限ったものとして使用していなかった点に着目している。よって、「[女性のホモソーシャルリティ]は、ホモソーシャルリティの語義からすると言葉としては成立可能」である(東 2006, p.77)。〈ホモソーシャルリティ〉は男性によって占有されているが、原理的には女性にも〈ホモソーシャルリティ〉を作り上げることは可能なのだ。

だが、「女性のホモソーシャルリティは、社会制度の中にも、言語の中にも、多くの女性の経験の中にも不在」である(東 2006, p.78)。それは、〈ホモ・ソーシャル〉体制に基づいて構築されている共同体において、「女性は「セクシュアルな存在」でしかなく、それゆえに「性的なもの」と強固に結びつけられ」ているからだ(東 2006, p.80)。男性によって構成されている男の〈ホモソーシャルリティ〉の中において、女性は〈性〉を付与された存在である。したがって、その枠内においては女性はいくまでも〈性〉的な存在で、「女性の間の個別的で強固な関係性を表す語は、「レズビアン」という「性的」とされている言葉しか用意されていない」(東 2006, p.80)。女性同士が特に肉体的／性的な欲求で結び付いている関係を我々は〈レズビアン〉と呼称してきたが、「非性的」関係で女性同士が結ばれることはなかった。それは、「強制的異性愛を伴う男性ホモ・ソーシャル体制においては「セクシュアルな存在」でしかない女性にとって、他の女性は男性の愛を争う競争あいてでしかありえない」からだ(東 2006, p.80)

インターネット上でよく使われる“害悪女”という語がある。“害悪女”は、自分の夫／彼氏の浮気相手となる可能性のある女性を指す。仮にその“害悪女”と見なされる女が他意なく接していたとしても、夫／彼氏が心を動かされる可能性があるとして妻／彼女が判断すれば、“害悪”と見なされる。ここで、仮に夫／彼氏が浮気や心変わりをしたとして、その夫／彼氏を責める態度はあまり見られない。あくまでも、夫／彼氏に近付き、夫／彼氏を誘惑した女が悪いのである。

男性が不倫をした際に、男性ではなく不倫相手の女性に批判が集中するのはよくあることだ。男の〈ホモソーシャルリティ〉において、女は男性にとって性的な存在であるが主体的な性は持ち得ない存在と見なされている。女性の譲渡を通して男性同士の連帯は強まり、一夫一婦制の婚姻制度により安定した社会体制が築かれる。これが、〈ホモソーシャルリティ〉あるいは家父長制に基づいた近代社会の基本ルールだ。よって、女性は男性によって〈聖女〉と〈娼婦〉に都合よく分類される。しかし、女性もまた女性を分類する。多くの女性にとって〈正妻〉という安定した立場はとても魅力的だ。いまだに多くの女性にとって結婚はゴールである。よって、結婚というゴールへの道筋を阻害する女、婚姻関係に亀裂を加える女は“害悪”でしかないのだ。このとき、“害悪女”にのみ批判の矛先が向けられ、男性の主体性は完全に無視される。どんなに誘惑されてもそれを突っぱねることは可能なのに、突っぱねなかった男性が責められることはない。あくまでも悪いのは、あるいは不倫のきっかけを作ったのは、不倫相手の女性なのだ<sup>7</sup>。

これはまさに男の〈ホモソーシャルリティ〉の内部では、女性自身も女性に〈性〉を付与して区別している事実の証明だ。女性が女性を“害悪”と見なすのは、その女性が〈性〉的な力で自ら

<sup>7</sup> 言うまでもなく、その背後には“男性の性欲は抑えられない”という偏見がある。



のテリトリーを侵犯し得るからである。女性を〈聖女〉か〈娼婦〉の2種に分ける男性の都合の良さをフェミニズムは批判してきたが、女性が女性をまなざすときにもまた、この二分法を無意識的に使っている<sup>8</sup>。

このようにいまだに日本の多くの女性が家父長制的な女性観を抜け出せないのは、日本において第二波フェミニズムが欧米ほどの成果を上げられなかったからであろう。第二波フェミニズムの成果として男女雇用機会均等法の施行が挙げられるが、同じ年に国民年金の第三号被保険者の制定、労働者派遣法の成立も為されている。この3つの法律／制度が同年に成立したという事実、日本における男女平等実現の難しさ、根強い近代的ジェンダー観が見て取れる。すなわち、女性の社会進出を推進する法律を成立させながらも、女性が家庭に収まる選択をしやすい制度、女性をより不安定な労働環境に置く法律を成立させているのである。事実、女性の正規雇用率は男性よりも圧倒的に低い。

日本の男女平等政策は、そもそも“外圧”によって行われた。1975年、国連により国際女性年が制定された。これに続き、1979年には女子差別撤廃条約（=女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約）が採択され、日本は1980年にこれに署名、1985年に批准した。アメリカ、ドイツ、フランス、中国も日本と同日に署名しており<sup>9</sup>、女性差別の撤廃、男女平等の実現は国際的な流れであったと言えよう。条約に批准するためには条約に則った政策を実現しなければならず、批准と同年に男女雇用機会均等法が制定された。1985年に日本において男女平等が矛盾を孕んだ形でしか実現しなかったのは、ここに理由が求められる。

1999年には日本で男女共同参画社会基本法が成立する。男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」である（男女共同参画社会基本法第2条）。この法律が成立した背景にも“外圧”がある。1990年5月に、国連は「西暦2000年に向けての婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略に関する第1回見直しと評価に基づく勧告及び結論」を採択した。2000年を目処に、より具体的な男女平等社会の実現を目指すことを定めたのである。この勧告を受け、日本政府も基本的な施策の見直しを行い、「西暦2000年に向けての新国内行動計画（第一次改定）」（1991年5月30日決定）の中で初めて「男女共同参画」という用語が使われた<sup>10</sup>。

このように、日本においてフェミニズム／男女平等を実現する政策は、国際的な流れに後押し

<sup>8</sup> ただし、男性が女性を2種に分けたらその分類は固定的になるのに対し、女性が同じ女性に対して行う分類は流動的である。誰もが“害悪女”になる可能性があり、それは同時に女性同士の敵対関係が狭い範囲、コミュニティで起こり得ることを示している。

<sup>9</sup> アメリカは日本と同じ1980年7月17日に女子差別撤廃条約に署名しているが、条約の批准はいまだしていない。

<sup>10</sup> 男女共同参画局は、「参加」ではなく「参画」という用語を使う理由を、「単に女性の参加の場を増やすだけでなく、その場において政策・方針の決定、企画等に加わるなど、より主体的な参加姿勢を明確にするため」としている（男女共同参画局、公開年不明）

されて進められた。いわば「管制フェミニズム」(大泉 博子 2018) だったのである。

したがって、日本において第三波フェミニズム以降目立った成果が上がっていないのも当然と言えるだろう。前述したワーママと専業主婦の対立構造も、男女雇用機会均等法の制定と第三号被保険者制度によって作られたのだ。では、どうすれば現在の体制、法制度のまま女性同士の連帯が実現するのだろうか。もちろん、より男女平等に近づき、女性同士が対立しなくていい体制、法制度に転換する方が好ましい。が、それにはかなりの時間が必要だ。そして、体制や法制度を変えるためにもまず女性同士の連帯が求められるのだ。今、この日本で私たち女性たちに何ができるのか、考えていきたい。

### 3.2 『キューティ・ブロンド』で描かれる女性同士の連帯

まず、アメリカにおいて女性の連帯はどのように描かれているのか、見ていきたい。

2001年にアメリカで公開された『キューティ・ブロンド』(ロバート・ルケティック監督 *Legally Blond*, directed by Luketic, Robert.) は、第三波フェミニズムの象徴的作品と言われている。バービー人形のような、ブロンドで胸の大きい女子大生エル・ウッズは、名家の子息である恋人ワーナーとの結婚を夢見ていたが、結婚相手は「真面目な女性」(Someone serious) でなければいけないとフラれてしまう。ワーナーはハーバードのロースクールへの進学が決まっており、30歳までに上院議員になることを目指している。家族の期待も高いワーナーにとって、エルは「プーちゃん」(Pooh Bear)、すなわち“可愛い存在”、愛玩の対象であり、大人になったら捨てなければいけない存在でしかなかったのだ。

ワーナーへの未練を捨てきれないエルは、自分もハーバードのロースクールに進学し、ワーナーを取り戻すことを目指す。物語は、エルがロースクールを首席で卒業し、自分を見下していたワーナーを捨て、誠実で優秀な弁護士と結婚して幕を下ろす。

この作品が第三波フェミニズムの象徴とされるのは、〈ガール・パワー〉が描かれているからだ。エルは自分が女であることを否定しない。女性らしい体つきを隠すことなく、それをより美しく見せるファッションを好む。ピンクでワフワフなポップデザイン、すなわち“Girly”なモノたちに囲まれ、プラダやシャネルなどのハイブランドを好む自身のこだわりを彼女は最後まで捨てない。たしかに、バービー人形のようなエルは男性にとって性的な魅力に溢れている。が、エルは男性ウケを狙って自分の洋服や持ち物を選んでいるのではない。エルは自分が“Girly”なモノが好きだからそれを選んでいるのである。エルの恋愛に対するスタンスは、決して受動的ではない。ハーバード入学という難関を乗り越えるパワーは、王子様の到来をただ待っているだけのプリンセスではないのだ。

アメリカにおける第三波フェミニズムのもう一つの象徴として取り上げられる、商業雑誌 *Sassy* (1998-1996) についての論考をまとめた上谷香陽は、*Sassy* の編集意図を以下のようにまとめている。

この雑誌の哲学においては、女の子であることは「よいこと」であった。Sassy は girl culture(女の子文化)を肯定的に評価した。そこには、主流派のメディアをとおして価値を貶められてきた「女の子であること (girlhood)」を自らの手に取り戻そう、というフェミニスト的な考え方があった。(上谷, 2012, p.191)

〈ガール・パワー〉とは、「女の子」が主体的に「女の子」であることを選び、そして「女の子」であるがゆえに発揮できる力である。第二波フェミニズムにおいては、「女の子らしさ」は否定的に語られていた。「女の子らしさ」は、すべて男性たちによって一方的に与えられた男性にとって都合のいい女性像であるとされたからだ。その結果、「女の子らしさ」を否定するフェミニストは男嫌いの、とげとげしい女であるというイメージが造形され、男性からも女性からも忌避されるようになった。しかし、エルは、第二波フェミニズムが作り上げたフェミニストの悪いイメージを払拭し、新しいフェミニズムの可能性を提示している。

また、この作品は〈シスターフッド〉も描いている。エルがハーバードで成功するきっかけとなったのは、彼女が〈シスターフッド〉＝「姉妹の誓い」(the bonds of sisterhood)を何より重視したからである。夫殺害の容疑を掛けられている依頼人の秘密を聞き出し、その秘密を守ることを選んだ。「誓い」を破り、秘密を法廷で明らかにすれば依頼人は間違いなく無罪になるとともに、依頼人の心を聞き秘密を聞き出したエルの将来も開ける。が、エルは頑なに「誓い」を守る。そんなエルの態度をロースクールの男性教授やワーナーは、「くだらない」(Screw sisterhood!)「バカ」(So what?)と卑下する。が、エルは自分の成功よりも〈シスターフッド〉を重視したことで、結果的に成功を収める。そしてまた、エルと依頼人とが〈シスターフッド〉を結ぶことになったきっかけも、もともと同じ社交クラブに所属していた先輩後輩であり、依頼人が主催しているフィットネスのクラスにエルが参加してダイエットに成功したという履歴があったからである。エルは依頼人の面会の際に“some necessities”として化粧品やファッション誌を差し入れている。依頼人はそれに感動し、エルに“You are an angel!”と言っている。つまり、エルは依頼人と“Girly”なモノで共鳴し合い、〈ガール・パワー〉で連帯したのである。〈ガール・パワー〉は「女の子」同士の連帯によって得られる力でもある。

『キューティ・ブロンド』は興行的にも成功を収め、高い評価を得ている。主演のリース・ウィザースプーンの出世作とあってよいだろう。2003年には続編『キューティ・ブロンド／ハッピーMAX』(チャールズ・ハーマン＝ウールフェルド監督, *Legally Blonde 2: Red, White & Blonde*, directed by Herman-Wurmfeld, Charles.)が製作された<sup>11</sup>。

では、『キューティ・ブロンド』で女性同士の連帯はどのように描かれているのだろうか。『キュー

<sup>11</sup> 2009年には『キューティ・ブロンド3』(サヴェージ・スティーブ・ホランド監督 *Legally blondes*, directed by Holland, "Savage" Steve.)が公開されているが、リース・ウィザースプーンは製作者として作品に関わっているものの、物語にエルは登場しない。エルの従妹であるブロンドの双子の姉妹が主人公であり、評価は決して芳しくない。

ティ・ブロンド』においては、女性同士の連帯を阻んでいるのは男性ではなく、女性である。

まず、エル入学を認めたロースクールの教員たちは全員男性である。ロースクールには女性の教員もいるが、入学資格を検討する委員会は男性のみで構成されている。彼らはエルの作成したPRビデオに啞然としながらも、彼女の出身大学での成績、LSAT (Law School Admission Test) の点数、その他課外活動での成果を認めている。エルのこれまでの実績を加点方式で認め、ロースクールに提出すべき論文をビキニ姿で出演したPRビデオにするという異例の行動を減点対象とはしていない。ハーバードのロースクールは男性を中心に構成されている〈男社会〉であるが、男女によって審査基準を変えるような不正は行われていない。エルの水着姿に下心を見せた教員もいない。ジェーン・スーは、教員たちが「最終的に彼女を合格にする根拠として「多様性」という言葉を使って」いたことについて、以下のような指摘をしている。

でもエルが「多様性を持つ」と判断されたのは、彼女の外見やPRビデオでのアピール方法が「ハーバード的じゃない」ってだけ。もしかしたらエルはハーバードにありがちな思考の持ち主かもしれないのに、あのビジュアルだけで「多様性」という言葉で括られてしまうのは偏見と言えば偏見で、なかなかヘビーな現実ではある。

(スー・高橋, 2018)

が、映画を改めて観てみると、「多様性」(diversity)という言葉が出てくるのは、エルのオールAという成績が「ファッション専攻」という法学とはまったく縁のない分野で得られたことに対してである。〈ファッション〉は女性的で、学術とはかけ離れたイメージを強く持っている。〈ファッション〉を学んだ経験がロースクールでどう活かされるのか、前例がないためにジャッジするのは難しい。それゆえ、難色を示す教員もいたが、別の教員が〈ファッション〉に対する偏見を「多様性」という言葉で否定し、音楽やデザインに興味を持っている事実に加点しているのだ。

さらに、ロースクールに入学してからも、エルはロースクールという男性ジェンダー化された組織内で、その組織を運営する教員たちによって差別されることはない。まず、そもそもエルが受講している講義の受講生を見るに、決して女性は少数ではない。男性の方が数は多いように見えるが、それほど極端な男女差は見受けられない<sup>12</sup>。ストロムウェルという女性教授に初回の授業で教室から追い出されているが、それは彼女が宿題をやってこなかったからである。一番前の席に座り、教科書も出さない学生をわざと当て、受講に必要な予習をしていないと確認した上で追い出すのは、エルが女性だからでも、ブロンドだからでも、ピンクのフワフワのペンを使っているからでもない。実際、後にエルと結婚することになるエメットも、ハーバードの教授はみんな

<sup>12</sup> これは、実際のハーバードのロースクールのことを言っているのではない。あくまでも、物語の中のハーバードのロースクールの設定について述べている。しかし、実際のハーバードのロースクールにおいても現在男女で学生数に大きな差はない。一方、法務省によれば、日本の令和2年の司法試験受験者数は男性2641人に対し、女性1062人となっていて、明らかに男性の比率が高いことが分かる(法務省, 2020)。

な意地悪で、ストロムウェル教授の授業を受けた後に部屋で泣いたことがあると言っている。ストロムウェル教授はエルでなくても同じ態度で接しているのだ。アカデミックな世界が男性を中心に構成されているのは事実だが、2001年の段階で物語内で造型されたロースクールに通う学生の男女比に大きな差はなく、入学したばかりのエルに対して教員たちは決して偏見を抱いていない<sup>13</sup>。ハーバードのロースクールにおいて、学生は性別によって差別されることはなく、あくまでも実力至上主義の世界として描かれているのである。

ただし、それは同時にハーバードのロースクールが女性にも男性同等の能力を求める場所であることも示している。ハーバードにおいて、エルが異端な存在と見なされているのは間違いない。エルが他の学生とは“違う”ことはハーバードの教員も当然気付いている。だが、エルの見た目が他の学生とは“違う”からといって、エルを不当には扱わない。女だから、可愛いから、おっぱいが大きいからという理由で優遇されないのは、もともと男性が多数派であったロースクールにおいて、女性を優遇も冷遇もせず男性と同等に扱っているからだ。つまり、ハーバードのロースクールは女性に“男性並”の実力を求める、男性に準じた価値基準に基づいて構成されているのである。

また、エルは行きつけのビューティサロンのスタッフ、客とも親和性が高い。ビューティサロンのスタッフであるポーレットはエルよりもかなり年上で、決して“美人”ではない。「高校中退の中年女」(middle-aged high-school dropout)で「三段腹にデカ尻」(stretch marks and a fat ass)のポーレットは、エルとはかけ離れている。ビューティサロンに来ている他の客も、黒人であったり太っていたりあるいは年を取っていたりと、〈ルッキズム〉の点においてエルよりも劣っている<sup>14</sup>。が、エルは決して“バービー人形”的ではない女性を見下したり、差別したりすることはない。一方ポーレットも、ワーナーに婚約者がいると知って泣きながら来店したエルを見て共感する。自分よりも若くて美しいエルを見て妬むことはないのだ。ハーバードのロースクールが男性ジェンダーを付与される場所であるのに対し、ビューティサロンは女性ジェンダーを付与される場所である。客のほとんどが女性であり、男性スタッフもいるが彼は見るからに“ゲイ”である。ビューティサロンという女性的な〈場〉で、エルはファッションや恋愛テクニックを通して女性との連帯を実現している<sup>15</sup>。

しかし、エルが連帯できない女性もいる。それは、同じハーバードの学生である女性たちである。特にワーナーの婚約者であるヴィヴィアン・ケンジントンは明らかにエルを敵視している。

<sup>13</sup> エルが法律事務所のインターンとして実際の裁判を担当した際に、その法律事務所の経営者でもあるキャラハン教授はエルに対してセクシュアルハラスメントを行う。が、インターンとなる前、学内の講義中にはエルを他の学生と同等に扱っている。エルが狭き門であるインターンの座を勝ち取ったのも、講義でのエルの発言が優れていたからである。

<sup>14</sup> エルは美人だけでなく、とても裕福な家に生まれている。ジューン・スーはエルを「ビバヒル的な世界から飛び出してきた女の子」と表している(スー・高橋 2018)。

<sup>15</sup> ハーバードの最初の洗札をエルに浴びせたストロムウェル教授は、エルを鼓舞しハーバードを辞める決意を翻させる。それが大学内ではなくこのビューティサロンで行われている点も、ビューティサロンが女性同士の連帯をより容易にする〈場〉として設定されている証左となる。



授業中にエルの答えを嘲笑し、エルがワーナーとヴィヴィアンが所属している勉強会への参加を申し出たときも、ヴィヴィアンとその親友であるクレアに拒絶されている。さらには、仮装パーティーを開催すると欺し、エルは1人だけそのパーティーに仮装姿（しかもバニーガール）で参加し、恥をかかされる。また、フェミニストでありレズビアンでもあるイニッドも、エルに対して嫌悪感をあらわにした表情で接している。

なぜ、彼女たちはエルを嫌うのか。エルに対してどのような偏見が向けられているのか。それは、“バービー人形”のような女性は美しいけれど頭が悪いという偏見だ。ワーナーが政治家となる自分に相応しいのはマリリン・モンローではなくジャクリン・ケネディだと言ったことから分かるように、エルのような容姿の女性は“dumb blonde”と見なされる。エルが異端な存在と見なされ嫌悪感を向けられるのは、“dumb blonde”はハーバードに入れるわけがないという偏見が根底にある。

だがそれと同時に、エルの存在は“バービー人形”にはなれない女性から見れば脅威である。言うまでもなく、エルは男性から見れば性的な魅力に溢れている。エルは“害悪女”なのである。ロースクールの女子学生たちがエルに対して“意地悪”なのは、エルを見下すと同時に嫉妬しているからである。エルがヴィヴィアンに欺かれてパーティーに行った際、エルはヴィヴィアンがバニーガールの格好を笑ったのに対して、ヴィヴィアンの服装を見て「不感症」(frigid bitch)、「慢性便秘症」(constipated)と言いつつ、つまり、ヴィヴィアンの見た目が決して“Girly”ではないと指摘したのである。それに対してヴィヴィアンは不快感を明らかにするが、クレアは「あなたには指輪が」(You've got the ring, sweetie.)と言いつつ、2人は指輪を見て怒りを鎮める。ヴィヴィアンにとってすでにワーナーと婚約しているという事実だけが、エルという脅威を否定する要因となっている。

一方でエルは決してヴィヴィアンに対して容姿で勝とうとはしていない。ポーレットにヴィヴィアンの容姿について問われた際に、エルは「マスカラとハイライトが必要だけどそれほどの“ブス”じゃない」(She could use some mascara and some serious highlight...but she's not completely unfortunate looking)と答えている。客観的に見て、ヴィヴィアンはエルに比較すれば性的な魅力に欠ける女性として造型されている。ヴィヴィアンは“マリリン”ではなく“ジャッキー”だ。しかし、エルはロースクールにおいて正々堂々と実力でヴィヴィアンに勝ち、ワーナーを取り戻そうとしている。すなわち、「女を使う」ことはしない。エルは自分の容姿やファッションにこだわりを持っているが、他人の容姿を見下して自己肯定感を上げるような女性ではない。ヴィヴィアンに“意地悪”されてバニーガールの格好をする羽目になったのも、ワーナーに言いつけることはない。イニッドは典型的な「興ざめフェミニスト」として造型されているが、エルは特に嫌悪感を示してはいない<sup>16</sup>。そしてまた、容姿で人を見下さないのは女性に対してだけではない。明らかに“非モテ”の同級生デヴィットが女性をデートに誘おうと苦戦しているときに

<sup>16</sup> 藤田秀樹は、イニッドについて「この女性学生は、その洒落っ気のない容姿と急進的なフェミニスト的言動によって、エルの特徴を際立たせる引き立て役 (foil) となっている」と指摘している (藤田 2018, p.166)。



は、自ら進んで助け船を出している。容姿に恵まれているにもかかわらず、エルは容姿で人を判断しないのだ。

そんなエルに対して〈意地悪な女〉は、“Girly”ではない女だ。エルがピンクを好んで身にまとっているのに対し、ヴィヴィアンもイニッドも服装はいつもグレーやダークブルーといった地味な色合いだ。エルが肌を露出した服を着ているのに対し、ヴィヴィアンやイニッドはタートルネックを着たり、ブラウスのボタンを一番上まで留めたりと、極力肌を露出していない。エルが〈女の子〉であることを楽しんでいるのに対し、ヴィヴィアンやイニッドはむしろ〈女らしさ〉や〈女の子であること〉 = girlhood を恥じているかのようだ。

エルのような girlhood を楽しめている〈女の子らしさを肯定する女〉すなわち〈永遠の女の子〉と、ヴィヴィアンやイニッドのような〈意地悪な女〉とは女性同士の連帯を結ぶことはできない。彼女たちは〈女の子〉／“Girly”をめぐって対局にいる。が、連帯を阻んでいるのは“意地悪な女”の一方的な敵意である。エルはヴィヴィアンが敵意を向けたときにはやり返すが、それ以外は自分から攻撃を仕掛けることはない。つまり、〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉との連帯を阻んでいるのは〈意地悪な女〉であり、〈意地悪な女〉が変わることで連帯は実現するのである。

実際、『キューティ・ブロンド』においても、〈意地悪な女〉側のヴィヴィアンが態度を変え歩み寄ることでエルとの間に連帯が生まれ始める。ヴィヴィアンは、自分だけにコーヒーを淹れるよう頼むキャラハン教授に不満を抱いていた。しかし、自分を指導する立場にいる男性に口答えはできず、ずっと我慢していたのだ。ヴィヴィアンは、男性たちにどんなに小馬鹿にされても Sisterhood を守り、自分の私利私欲のために約束を反故にはしないエルの正義感を知り、エルへの偏見を捨てる。ヴィヴィアンはエルに、実はワーナーは補欠合格だったというワーナーの秘密を話す。これは男社会の中では男以上に実力を求められる女の小さな復讐であり、その復讐を通してエルとの間に共感が生まれるのだ。

このように、『キューティ・ブロンド』においては“害悪女”と見なされるエルが「女を使う」ことなく正々堂々とライバルと闘い、その熱意が対局にいる〈意地悪な女〉の心を動かし、女性同士の連帯が実現している。

### 3.3 〈意地悪な女〉を生み出す構造

こうして『キューティ・ブロンド』において物語は大団円を迎えるわけだが、女性の連帯が実現しないのは〈意地悪な女〉のせいなのだろうか。現実世界においても〈意地悪な女〉さえ変われば、女性は“ガールパワー”を発揮できるのか。そもそも、〈意地悪な女〉を作り出しているのは何なのか。

ヴィヴィアンやイニッドもまた、偏見を受けている存在だ。エルは、“dumb blonde”という偏見を受けている。一方ヴィヴィアンは、ハーバードのロースクールに進学できるような女性は地味でブスなガリ勉（ヴィヴィアンはブスではないが）という偏見、イニッドは言うまでもなく「興

「ざめフェミニスト」に対する偏見をもとに造型されたキャラクターだ。エルが白人のプロンド女性のステレオタイプとして造型されているのと同様に、ヴィヴィアンやイニッドもまたステレオタイプになぞらえて造型されている。

このようなステレオタイプは、完全なるフィクションではないだろう。第二波フェミニズムの時代（1960～80年代）は、今よりも女性の社会進出は難しかった。ロースクールに進学するにしても、アカデミックな世界で女性の権利を訴えるにしても、男性中心のコミュニティに女性が入っていくためには“男勝り”でなくてはならなかった。そこで〈女〉を見せてしまうと、〈女〉を使ってその世界に入り込んだという偏見を受けかねなかったからだ。女性は男性より劣っているのが当然だという価値観の中で男性と対等に渡り歩くには、〈女らしさ〉を捨てる必要があった。〈女〉であることはマイナス要因でしかなかったのだ。「興ざめフェミニスト」と表されるフェミニストのネガティブなイメージは、こうして作り出された。

〈意地悪な女〉は男の〈ホモソーシャリティ〉の中で女性が男性と同じ権利を獲得しようと格闘する中で必然的に生まれた。〈女の子〉のままでは男性と同等にはなれない、それはミソジニーの共有が男性社会における成功の条件だったと言い換えてもいいだろう。女性として生まれながらも〈女の子〉を捨てなければ男性社会で生き残れなかった女たちは、〈永遠の女の子〉を嫉妬と羨望と嫌悪感の入り交じった複雑な感情でまなざす。それは自分たちには選べなかった〈女の子〉としての人生を〈永遠の女の子〉が楽しんでいるからだ。

もちろん、女性として生まれたからと言って〈女の子〉である必要はない。問題は、男のホモソーシャリティにおいては選択肢が限定されていたという点にある。つまり、〈意地悪な女〉を作り出しているのは、女性を不当に扱ってきた男のホモソーシャリティだ。社会的な地位や特権を独占してきた男中心の社会構造なのだ。高橋幸は、「性的魅力を自己利益のために使う女性のふるまいが可視化されるほど、男性たちは警戒感と恐怖感を強め女性憎悪を募らせるという仕組みがある」（高橋, p131）と述べているが、この「女性憎悪」＝ミソジニーは、ホモソーシャルの中で男性と共存する女性によっても共有されている。

エルは、「興ざめフェミニスト」に代わる新しい世代のフェミニストだ。バービー人形のような容姿で男性と対等に戦うエルは規格外で、本人が自覚していなくてもその存在自体がフェミニズムである。第二波フェミニズムの恩恵を受け、〈女の子〉であることを最大限楽しんで男性と対等に渡り合う新しいフェミニスト。「興ざめフェミニスト」として造型されているイニッドは、エルにこそフェミニズムの新しい可能性を見出し、希望を感じるべきだった。エルに眉をひそめるイニッドの存在は、第二波フェミニズムの限界を象徴している。

『キューティ・ブロンド』には女性同士の連帯が描かれている。エルとヴィヴィアンの和解はカタルシスを観客に与えるシーンとなっている。が、仮にヴィヴィアンのような〈意地悪な女〉との連帯がなくても、エルは成功していただろう。ヴィヴィアンとの連帯がなくても、エルは依頼人と〈女の子〉同士連帯していた。エルはヴィヴィアンと連帯したことで裁判を勝利に導いたわけでもないし、ワーナーをヴィヴィアンから譲渡されたわけでもない。ヴィヴィアンが〈意地

悪な女)のままであったとしても、エルは自らの〈ガールパワー〉で勝ち上がっていただろう。つまり、『キューティ・ブロンド』において〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉との連帯は、物語を盛り上げるエッセンスでしかないのだ。

男のホモソーシャルリティによって分断されている女の連帯をどうやって実現させ、男の連帯＝ホモソーシャルに対抗するのか。『キューティ・ブロンド』においては、〈意地悪な女〉の改心によって実現している。〈意地悪な女〉はいわばヒール役だ。エルが正々堂々とヴィヴィアンと戦おうとしていても、“かわいいは正義”の世界で〈意地悪な女〉はヒールとして扱われる。よって、ヒール役には改心が求められるし、ヒロインへの屈服と共鳴が物語をハッピーエンディングへと導くのだ。しかし、先にも述べたように〈意地悪な女〉は女性が積極的に選択した生き方とは限らない。女性が中心のビューティサロンには〈意地悪な女〉がいなかったことから分かるように、ハーバードのロースクールでは〈意地悪な女〉であることが処世術だったのだ。

現在も日々〈意地悪な女〉は生み出されている。インターネット上で繰り返される女同士の対立構造はさまざまだ。“害悪女”への罵詈雑言、ワーママ対専業主婦、若い女対もう若くない女、子持ち女対子なし女、自分と違う属性を持つ女性に対しての対抗意識、これは両者を〈意地悪な女〉にしている。

日本で暮らしていると、自らを「おばさん」と自嘲気味に自称する女性にたくさん出会う。「おばさんだけいいですか」と遠慮がちに女性が言わなければならないのは、女性に若さを求める、日本男性の根強いロリータコンプレックスによるものだろう。そしてさらに厄介なのは、女が自分以外の他の女性にも「おばさん」と認めることを強要する点だ。女は死ぬまで〈女の子〉であってもいい。それを選ぶのは個々人の選択であるのに、自重することを女が女に求める。そして、“いい年をしたおばさん”が〈女の子〉であろうとするのを侮蔑的なまなざしで見つめる。“かわいい”、“Girly”は若い女性にだけ許された特権であると女性自身が偏狭な固定観念に縛られているのだ。これは男性のロリータコンプレックスを共有しているからであり、男性の価値観に迎合して女性自ら自分たちの選択肢を制限しているのである。

『キューティ・ブロンド』はたしかに新しいフェミニストの姿を描き出している。が、その一方で〈意地悪な女〉を生み出している社会構造にまでメスを入れられているかという点、そうではないだろう。実際、『キューティ・ブロンド2 ハッピーMAX』でエルが転職した法律事務所に勤める女性はとげとげしい黒人女性とオドオドしているファッションとは縁遠い白人女性という、“いかにも法律事務所で働いていそうな女性”のステレオタイプとして造型されている。そして、黒人女性の方は当然のようにエルに対して〈意地悪な女〉となる。『キューティ・ブロンド』から2年、世の中はそう変化していないのだ。

また、日本における『キューティ・ブロンド』の宣伝それ自体に、偏見が含まれていた点も無視できない。原題*Legally Blonde*に『キューティ・ブロンド』という日本語のタイトルを付け、さらにはDVD販売時には宣伝コピーとして「ちょっとエッチでちょっとホロッ プリティ・ピンクコメディ! ホレちゃうね、ピンクにがんばるオンナのこ」とポスターやDVDのジャケット

トに記載した。しかし、管見の限りにおいて「エッチ」なシーンなどなかった。『キューティ・ブロンド』にはキスシーンすら登場しない。たしかに、エルは“Girly”なモノを好む〈女の子〉だ。だが、それを選んでいるのはエル自身であり、他者から「キューティ」「プリティ」「ピンク」「オンナのこ」といった枠に当てはめるのは、この映画の趣旨を完全に読み違えている。海外の映画が日本で公開される時、日本版のポスターの酷さがしばしば話題になるが、*Legally Blonde* の例もかなり酷い部類に入るだろう。



図1 『キューティ・ブロンド』VIDEO・DVD 発売告知ポスター<sup>17</sup>

以上、『キューティ・ブロンド』を例にアメリカにおける女性同士の連帯=Sisterhoodの可能性を見てきた。コメディ映画であるため、リアリティに欠ける点はもちろんある。が、エルが〈女の子〉であることを楽しみながら女性同士の連帯を実現させるのは、女性同士が結ぶ関係の新しい可能性を表している。藤田秀樹の述べるように、「エルが男性とのロマンスよりも女性同士の絆に傾斜していくことは、図らずも男性中心の秩序に対するひとつのレジスタンスにもなっている」(藤田2018, p.169)のである。

#### 4 多様性の認められない〈多様性の時代〉に生きる生きづらさ

“多様性”や“自分らしさ”が求められる時代である。しかし、先に述べたように“自分らしさ”の追求は決して簡単にはできない。電車に乗ると多くの美容整形外科の広告が目に入る。全身脱毛や二重整形手術を“自分らしさ”と絡めて勧めてくる。“自分らしさ”はお金と時間がなければ獲得できない。

<sup>17</sup> 「ちょっとエッチでちょっとホロッ プリティ・ピンクコメディ! ホレちゃうね、ピンクにがんばるオンナのこ」というコピーが掲載されていないDVDのジャケットもあるようだが、筆者が購入したDVDのジャケットには図1同様に当コピーが掲載されている。

また、〈意地悪な女〉はエルのような〈永遠の女の子〉にだけ向けられるわけではない。“自分らしく多様な生き方”をする者すべてに〈意地悪な視線〉は向けられる。2023年に亡くなったタレントの ryuchell を例に挙げたい。ryuchell はパートナーである peco と婚姻関係を結び、一子をもうけた。子どもの誕生後は積極的に育児に参加する“イクメン”としてメディアに登場することも多く、2018年には「イクメン オブ ザ イヤー」に選ばれている。が、性的な対象が男性であるとカミングアウトし、peco との離婚を発表した。離婚はしても peco と家族であり続け、2人で協力して子育てをしていく、peco とのパートナーシップは続けるとし、実際、離婚後にも peco の YouTube ちゃんねるに登場している。が、この ryuchell のカミングアウトは猛バッシングを受け、それだけが原因とも言えないが ryuchell はこの世を去った。

ryuchell と peco の〈新しい家族〉としての生き方は、“多様性”の象徴であっていいはずだった。現在、多くの方が日本にも同性婚を認めるべきだと考えている<sup>18</sup>。同性婚が認められたら、今よりも多様な夫婦が生まれる。“多様性”を認めるのであれば、そもそも“家族”であるために婚姻関係を結ぶ必要すらなくなる。ゲイカップルが養子をとって家族になってもいいし、その際に法律婚を選ぶかどうかは本人たちの自由でいい。一夫一婦制を守る必要もない。本人たちが了解しているのであれば、どういう家族を作り上げてもいいのだ。

しかし、ryuchell へのバッシングは多くの日本人の“多様性”への理解が表面的なものでしかない事実を露呈させた。実際に“自分らしく多様な生き方”をする人物に対して、人々は〈意地悪な視線〉を向け、自分勝手だと非難する。ryuchell の場合は「peco がかわいそう」と peco を理由に ryuchell をバッシングする傾向が強かった(吉崎 2023)。peco 自身が ryuchell を非難する発言などしていないのに、peco の多様な考えを考慮することなく固定観念で peco を被害者と見なし、ryuchell を悪者にしたのである。規格外の生き方を選んだ ryuchell は、エルのように強く居続けられなかった。エルは物語の中の登場人物に過ぎない。ryuchell は生前、以下のように発言していたという(当時は「りゅうちえる」名義)。

先入観をなくすためには、社会全体を変える必要があると説くりゅうちえるは、「学校では『人と違うのは変わり者』だと教えるのに、社会に出たら『人と違ってないと抜きん出ることはいできない』と言われる。世界はマルとバツだけで答えが出るものばかりじゃないのに、教育で(多様性への)土台が作れていない」と持論を披露。また、「多様性を否定する人も認める。理解できなくても認め合うのが多様性」と訴えて参加者をうならせた。(ORICON 2020)

ryuchell は〈多様性〉を理解する「土台が作」られていない世の中で、誹謗中傷の対象とされた。ryuchell が実践しようとした〈多様性〉、〈自分らしさ〉は「人と違う」が故に批判された。そもそも、誰かと同じ〈自分らしさ〉などないはずなのに。

<sup>18</sup> 2022年に厚生労働省が実施した「第7回全国家庭動向調査」によれば、同性婚を認めるべきとする人は75.6%に及んでいる(厚生労働省 2023)。



現実世界において、女性同士の連帯をもっと可能にしていくためには女性だけではなく、すべてのジェンダー、セクシュアリティを持つ人々に対する偏見を捨て、“多様な生き方”を尊重する必要がある。男のホモソーシャルリティがあまりに堅牢であるから、それに対して女性同士の連帯が可能かどうかを検討してきたが、そもそも男女に分かれて連帯関係を作る必要性などない。男のホモソーシャルリティが性別を男女の2つに分けている現状においては、女性同士が同じ境遇にある仲間として連帯する必要性はある。しかし、男女の婚姻関係に基づいた社会体制を壊し、“多様な生き方”を認めれば、セクシュアリティやジェンダーを超えた連帯関係も可能になる。

しかし、“多様な生き方”を目の前にすると、男も女も〈意地悪〉になる。“多様な生き方”は自分勝手に思えるのだ。自分とは異なる生き方を選べる人は、自分よりも得をしていると思えるのだ。男も女も「不当な剥奪感」、「相対的な剥奪感」に縛られている。

“多様性”の例としてゲイが挙げられる。たしかに以前よりはゲイに対する社会の許容度は上がっただろう。「おかま」や「ホモ」が差別用語であるという認識も広まっている。また、同性愛カップルを扱ったドラマや映画も増えている。同性愛カップルのポピュラー化が起きているとも言えるだろう。

が、ここにもあらたな分断を作り出す要因がある。近年国内で製作された同性愛カップルをメインに扱った代表的な作品を挙げてみよう。

ドラマ『トランジットガールズ』（フジテレビ 2015）

ドラマ『おっさんずラブ』（テレビ朝日 2016）

ドラマ／映画『きのう何食べた？』（テレビ東京 2019 2021 2023）

ドラマ『作りたい女と食べたい女』（NHK 2022）

ドラマ『僕らの食卓』（BS-TBS 2023）

ドラマ『私の夫と夫の彼氏』（テレビ東京 2023）

映画『his』（ファントム・フィルム 2020）

映画『エゴイスト』（東京テアトル 2022）

まず、注目すべきはほとんどが男性同士のゲイカップルを描いている。『トランジットガールズ』『作りたい女と食べたい女』はタイトル通り女性同士のレズビアンカップルを描いているが、男性同士のゲイカップルに比べるとポピュラー化は進んでいない<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> 『トランジットガールズ』の主人公の名は葉山小百合であり、名前に「百合」が入っている。「百合」は女性同士の同性愛を指す隠語であるが、男性同士の同性愛を「薔薇」と呼ぶのがもはや差別的な表現であるという認識が広がっているのと同様、「百合」という呼称は当事者が使うというよりも、むしろ女性同士の恋愛関係をフェティッシュに消費する側が使う用語であろう。「百合」を消費する主体が誰であるのかは改めて考察する必要があるが、「百合」はあくまでもフィクションの世界で描かれる女性同士の同性愛であり、それをエンタメとして楽しむ消費者がいることを指摘しておきたい。自身の性的な嗜好、しかもマイノリティとして差別され得る性的な嗜好を、エンタメあるいはエロとして消費されることを当事者が望んでいるとは到底思えない。



そしてまた、ゲイカップルを扱った作品において登場するゲイは、みなとても美しい。フェミニズムがポピュラー化する過程において「感じのいいフェミニスト」が受け入れられたように、「美しく穏やかなゲイカップル」が受け入れられている。実際はあらゆる容姿、あらゆる世代のゲイカップルが存在しているにも関わらずだ。これでは『アナザー・カントリー』(Another Country 1984, directed by Kanievsk, Marek)の時代、あるいは萩尾望都、竹宮恵子らの「24年組」の時代から何も変わっていない。最近、ゲイカップルを扱ったタイのドラマ(『2gether』2020など)も日本で人気だが、そこに登場するゲイカップルもとにかく美しい。

このような現象を通して、ゲイカップルの“多様性”が認められたと言えるだろうか。結局、そこで描かれるのは非現実的なゲイカップルで、誰のためにそんな非現実的なゲイカップルが描かれているのかと言えば、作品のメインターゲットは女性視聴者だろう。女性が観賞して楽しむ、消費できるカップルとして造型されているのだ。つまり、自分にとって都合がよく、利用できる“多様性”は認めるけれど、自分に特にメリットのない“多様性”、自分には与えられなかった選択肢を選んだ“多様性”には〈意地悪な視線〉を向けて自分勝手だと排除する、これが今の日本の“多様性”をめぐる現実だ。

近代社会において作り出されたあるべき男の姿、女の姿、家庭のあり方、夫婦のあり方、そういったステレオタイプは根強く残っている。ステレオタイプを逸脱する存在、行動は批判の対象となる。SNSは見知らぬ者同士の連帯も可能にしたが、見知らぬ者からの誹謗中傷も可能にした。自分とは異なる生き方をする人に対し、とても〈意地悪〉なのだ。

これまで見てきたように、女性同士に限らず、人と人との連帯を阻むのは〈多様性〉に対する妬み、剥奪感、羨望、拒絶感である。〈自分らしさ〉が求められる世の中であるのに、自分とは異なる生き方をする人、自分らしく生きる人に〈意地悪な視線〉を向け、正しくあるように促す(時には暴力的なことばで)。その“正しさ”は男のホモソーシャルリティが作り出した価値観に基づいている。連帯すべき女性同士の対立を生み出しているのは男性的な価値観なのである。正しくないものを排除する自浄作用が働くことによって、男のホモソーシャルリティはさらに強固になっていく。そしてそれは〈多様性〉を認めない生きづらい世の中を持続させる悪循環を生み出しているのである。

私的な話で始めた文章なので、私的な話でまとめたい。

筆者は〈永遠の女の子〉でありたい女である。その生き方を自分で選んだ。エルのように着たい服を着て、自分の好きなモノに囲まれて過ごすのが私の生き方だ。ファッションにこだわりがあり、ハイブランドが新作コレクションをWebで生中継する際にはチェックして次のトレンドを確認する。体型にも気を遣い、筋トレは欠かさない。子どもは持たず、自分自身に投資するのが私の選んだ生き方だ。〈永遠の女の子〉でありたいが、〈女らしさ〉の基準は自分自身で決める。私にとっての〈女らしさ〉は他の誰の〈女らしさ〉とも違う。そして、言うまでもなく私はフェミニスト、いや平等主義者である。

しかし、筆者に対して〈意地悪な視線〉を向ける女性が多い。筆者を“害悪”と見なす女性もいる。が、何かを選ぶということは何かを捨てることでもある。逆に何かを捨てざるを得なかったからこそ選べたものもある。すべてを持っているスーパーウーマンなど存在しない。エマ・ワトソンでも悩みはあるだろう。その人が持っているものではなく、持っていないもの、持てなかったものに目を向けるべきだ。ネオリベラリズムの観点においては、何でも自己責任論に帰結させる。しかし、社会の構造上、選べない選択肢もたくさんある。現状、同性愛者には結婚（法律婚）という選択肢は選べない。同性愛者に結婚という選択肢が与えられてこなかったのは、国民は結婚し子どもを持って一人前だという近代的な家族観、国民観による。男のホモソーシャルリティは同性愛者に結婚という選択肢を与えなかったのだ。それを自己責任だと言うのは酷すぎる。

インターネット上で複雑に交錯する〈意地悪な視線〉を見て思う。その視線は個人に向けるべきではなく、もっと大きな“何か”に向けるべきである。それが女性同士の連帯を可能にし、ひいては様々な境遇にいる人間同士の連帯を可能にする。

最後に付け加えておきたいが、もちろん男性にも〈永遠の男の子〉でいる選択肢はある。

## 参考文献一覧

東園子 2006 「女同士の絆の認識論——「女性のホモソーシャルリティ」概念の可能性——」

『年報日本科学』27, 大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室, pp.71-85

上谷香陽 2012 「フェミニズムとガール・カルチャー (Girl Culture)

——雑誌 *Sassy* の語り方——』『応用社会学研究』54, 立教大学社会学部, pp.185-199

大泉博子 2018 「「男女平等社会」のイノベーション —「男女共同参画」政策の何が問題だったのか—」『政策オピニオン』97, 2018年9月, 平和政策研究所, <https://ippjapan.org/archives/1218>, 2023年10月12日閲覧

ORICON NEWS 2020 「りゅうちえる、“多様性”について持論「否定する人も認めるのが多様性」」

6月29日公開, <https://www.oricon.co.jp/news/2165703/full/>, 2023年10月12日閲覧

ギル, ロザリンド 「ポスト・ポストフェミニズムなのか?——ポストフェミニズム時代におけるフェミニズムの新たな可能性」(河野真太郎訳) 『早稲田文学』第十次 22, 2020年春号, 早稲田文学会, pp.156-183)

Gill, Rosalind. 2016 *Post-postfeminism: new feminist visibilities in postfeminist times* “FEMINIST MEDI STUDIES”16-4, Routledge, pp.610-630

厚生労働省 2023 「第7回 全国家庭動向調査」2023年8月22日公開,

[https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ7/NSFJ7\\_top.asp](https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ7/NSFJ7_top.asp), 2023年10月13日閲覧

産経新聞 2023 「心身の準備を整えて、本当の自分を迎える準備を [フェムテックを、もっと! ]」

『metropolitana Tokyo』 3月17日公開 <https://metropolitana.tokyo/ja/archive/>

metropolitana241-special-06 2023年10月12日閲覧

J-CAST 2016「ジャニーズ事務所「手紙」が物議 37万人「SMAP 署名」の波紋」『J-CAST ニュース』<https://www.j-cast.com/2016/12/12285920.html?p=all> 2016年12月12日 2023年10月12日閲覧

スー, ジェーン・高橋芳朗 2018 「「可愛い子=おバカ」だと、どこかで思っていないか？

——ジェーン・スー&高橋芳朗のラブコメ映画ガイド9』『GQ』3月21日,  
コンデナスト・ジャパン,  
<https://www.gjapan.jp/culture/movie/20180321/love-romantic-comedy-09>,  
2023年10月9日閲覧

関根麻里恵 2020 「「ギャル（文化）」と「正義」と「エンパワメント」『GALS !』に憧れたすべての「ギャル」へ』『現代思想』48-4, 2020年2月, 青土社, pp.77-84

セジウィック, イブ・コゾフスキー 2001

『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗・亀澤美由紀翻訳）  
名古屋大学出版会

Sedgwick, Eve Kosofsky 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press

高橋幸 2020 「女を使う」から「女子力」へ 女として見られる／見せることをめぐるポリティクスの現在』『早稲田文学』第十次22, 2020年春号, 早稲田文学会, pp.128-137

田中東子 2020 「感じのいいフェミニズム？ ポピュラーなものをめぐる、わたしたちの両義性」『現代思想』48-4, 2020年2月, 青土社, pp.26-33

男女共同参画局 公開年不明 「男女共同参画社会基本法成立のあゆみ 執務提要

第3章 平成元年から2000年プランの策定（平成8年）まで」  
[https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/law/kihon/situmu1-3.html](https://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/situmu1-3.html)  
2023年10月12日閲覧

change.org 2019 「#KuToo キャンペーン院内集会を開催しました」6月14日公開,

<https://www.change.org/l/jp/20190611kutoomt>, 2023年10月12日閲覧

バネット＝ワイザー, サラ 2020 「エンパワード——ポピュラー・フェミニズムとポピュラー・ミソジニー イントロダクション」（田中東子訳）『早稲田文学』第十次23, 2020年夏号, 早稲田文学会, pp.212-252

Banet-Weiser, Sarah 2018 “Introduction” *Empowered Popular Feminism and Popular Misogyny*, Duke University Press

藤田秀樹 「屈服すると見せかけて素早く反撃—ロバート・ルケティックの『キューティ・ブロンド』における「馬鹿な金髪美人」という戦略」『富山大学人文学部紀要』69, 富山大学人文学部, pp.161-178

法務省 2020 「令和2年司法試験男女別受験状況」

<https://www.moj.go.jp/content/001345362.pdf> , 2023 年 10 月 12 日閲覧

吉崎洋夫 2023 「「ryuchell を批判している声を聞くと私は悲しい」 peco さんが婚姻解消後も連載担当に語っていた「2 人の愛」」『AERA.dot』2023 年 7 月 14 日公開, 朝日新聞出版,

<https://dot.asahi.com/articles/-/196034?page=1>, 2023 年 10 月 12 日閲覧

ルケティック, ロバート監督 2001 『キューティ・ブロンド』(戸田奈津子翻訳)

20 世紀フォックス

Luketic,Robert (Director) . 2001, *Legally Blond*, MGM

最後に、2023 年度をもって退官される渡浩一先生には、先生が政治経済学部に所属されていたところから大変お世話になりました。年齢も性別も研究分野も異なっておりますが、互いに“動物好き”という点で連帯関係にあったと勝手に信じています。国際日本学部の学生と対話するという刺激的な時間を持つことができているのも、渡先生のおかげです。本当に有り難うございました。